

これに対して6月放流分の回収率は0~9.1%と低かった。A点放流分はすべて与論島に漂着し、回収率は3%であった。B点放流分はすべて伊平屋島と伊是名島に漂着し、回収率は9%であった。C点放流分は与論島に5枚、伊平屋島に3枚が漂着し、回収率は9.1%であった。潜水観察や曳網採集調査のフィールドに最も近いD点放流分は、まったく回収されなかった。また、最も西のE点放流分

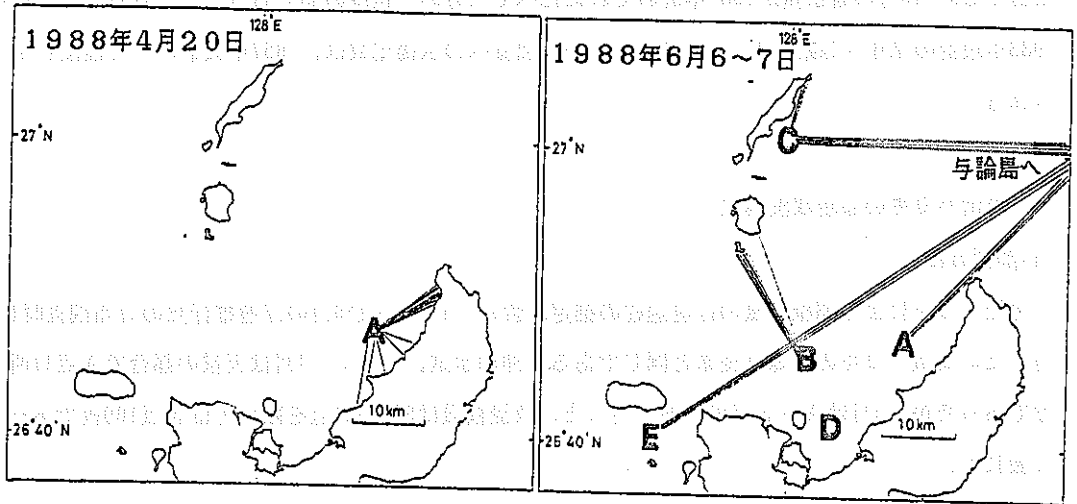


図21 海流ハガキの放流点と漂着点。図中のアルファベットは表12の放流場所に対応する。

は回収率3%で、すべて与論島に漂着した(表12, 図21)。

海流ハガキの漂着点は、過去の調査から放流場所、放流時期、さらに年によっても大きく異なることが明かになっている(沖縄水試, 1988)。今回も4月分は沖縄島に漂着したが、6月分については伊平屋島、伊是名島や与論島など北から北東方向で回収された。これは時期々の海流や風(風成流)など流況の違いを反映していると考えられる。また、6月の海流ハガキが沖縄島に漂着しなかったことと、1988年のハマフェエキの着底が例年よりも1ヶ月ほど早く終了したことは、年による着底量の多少との関連から興味深い問題である。

要 約

- ・45~50m³水槽9面で20~34mm種苗を82,800尾生産した。
- ・マガキ幼生・人工プランクトン・フィジー産ワムシの初期餌量系列で、日令6-12日目の大量減耗期を越えた段階で6.0~29.4%とかつてない高い生残率が得られ、大量生産への見通しがついた。
- ・全長7~8mm(日令25~30日)で大きな減耗がみられたが、栄養強化したアルテミアの投餌で防止できた。
- ・全長10~15mmで共食いが激しくなり、大量減耗が生じた。

- ・中間育成後の生残率は43.5%で、前年より10%向上した。これは鳥による食害防止などの結果と考えられる。
- ・1988年は羽地外海の源河沖で平均尾叉長93mmのものを約2万尾、国頭村辺土名漁港で平均87mmのものを約9千尾、それぞれ11月と12月に放流した。放流魚はすべて右腹鰭を抜き、そのうちの10%程度には13mmH型タグを付して二重標識した。
- ・放流場所はいずれも水深20m内外で、海底は泥地であった。
- ・放流魚の異形魚率は、源河放流群が33.41%、辺土名放流群が27.51%であった。
- ・1985年放流群の再捕および市場での発見は3月までであったが、4月以降はなかった。この群の1988年17年間の推定再捕数は13個体と推定された。
- ・1986年放流群はほぼ周年にわたり、再捕あるいは市場調査で発見された。この群の同一年級の天然群に対する混獲率1.14%、また推定再捕数は31個体と推定された。
- ・1987年放流群も周年にわたり再捕された。年のはじめは遊漁による再捕報告が多かったが、10月以降は市場での発見が多かった。この群の混獲率は2.00%、また推定再捕数は254個体と推定され、過去47年の放流群の中で最も多かった。
- ・1985年および1986年放流群ともに、放流点から約5km以内の範囲で再捕された。
- ・1987年放流群の再捕位置は、年のはじめには放流点から2km以内の範囲であったが、月を追うごとに再捕範囲は徐々に拡大し、10月以降は古宇利島と屋我地島の東沖で再捕されるようになった。しかし再捕位置は放流点から5km以内の範囲であった。
- ・1988年源河沖放流群は、放流後2週間目までは羽地外海や羽地内海の定置網で計38尾が再捕されたが、それ以降の再捕報告はない。
- ・1988年辺土名放流群の放流後の分布の変化を潜水観察で調べたところ、徐々に辺土名漁港内に入り込み、放流後91日目でも漁港内で観察され、少なからぬ滞留が確認された。
- ・1987年放流群の成長には尾叉長で最大10cm程度の差がみられ、バラツキが大きいことがわかった。
- ・名護および国頭漁協のセリ市場に、調査海域から水揚げされたハマフエフキの量は各々6,130.8kgと2,923.6kg、推定水揚げ尾数は12,125尾と4,143尾であった。量では前年に比べて約700kgほど減少したが、尾数では約5,000尾弱増加した。これは1987年級群が卓越年級群であるために、個体重量の小さい1歳魚の漁獲が多かったことによる。また、10月以降の1歳魚の全体に占める率は70~80%の高い比率であった。
- ・浮遊稚仔魚の分布量は、4月に1.0個体/1,000m³、5月に2.0個体/1,000m³で過去47年間で最も少なかった。
- ・1988年のハマフエフキの着底は、4月下旬に始まり7月中旬には終了した。着底のピークは5月中旬から6月上旬であった。着底開始、ピーク、着底終了のいずれも通常の時期より1ヶ月以上も早かった。
- ・海流ハガキは、4月は沖縄島北部西岸に多く漂着し、回収率は22%と高かった。しかし6月は伊平屋島、伊是名島、与論島などハガキ放流点の北から北東方向に漂着し、回収率は低かった。6月の漂着状況とハマフエフキの着底が例年より1ヶ月以上も早く終了したことは興味深い。